

コロナ禍はさまざまところで社会の中のマイノリティの問題を見えやすくしました。世間がふつうに通勤、通学をしている中、オンライン授業を受け続けたみなさんも、コロナ禍におけるマイノリティだったと言えなくもないでしょう。今回は、マイノリティの問題を考えるうえで忘れてはならない「障害」のことについて、知っておきたいことをご紹介します。

障害とは何か

障害とは、なんらかのハンディキャップを抱えていて、日常生活に支障をきたす状態のことです。同時に、障害は社会の側にあるという考えも、広く知られるようになってきました。

たとえば、足にマヒがあって通学が困難な人がいたとします。この状態は「歩行機能に障害がある」と言えます。その場合、歩けるようになることが障害の回復です。同時に、この状態を「移動手段が限られているという障害がある」と言うこともできます。この場合、車椅子で移動しやすい大学キャンパスを作ることが障害の改善になるかもしれません。

バリアフリー

障害を抱えている人といない人の間にある障壁(バリア barrier)がない(フリー-free)ことをバリアフリーと言います。わかりやすく言うと、障害を抱えていても、そうではない人と同じように生活できるよう工夫することです。

たとえば、音声のみの記者会見は、耳の不自由な人にとって、内容を理解する上で障壁となります。そこで、手話通訳つけることで、この障壁を減らそうと試みるわけです。

大学も昔に比べるとかなりバリアフリー化が進みました。しかし、まだ工夫できる場所もあるでしょう。大学に限らず、誰かにとってバリアになっていることはないか、どんな工夫ができるか、という視点で世の中を見ることは、これからの社会人にとって大事な資質となるでしょう。



多様性を受け入れる

バリアフリーが進めば、大学生活の中でなんらかの障害を抱えた人と会うことも当たり前になってきます。障害と言ってもそのありようは様々です。まずはそれがどんな生活なのか知ろうとすることです。想像もしていなかった苦労や笑い話を聞くことができるかもしれません。そうやって視野を広げていくことが、多様な生き方を受け入れる大きな一歩になるでしょう。